

2026年 9月 30日
北見支店飼料課 齋藤健吾

アメリカ 出張レポート

期間 : 2026年9月5日~2026年9月15日
訪問国 : アメリカ ワシントン州、アイオワ州、イリノイ州
訪問先 : 牧草製造業者、DDGS 製造業者、牧場

■地元のスーパー「Fred Meyer」

牛乳がℓあたり何円で、どの程度の商品点数が並んでいるか？を調査すべく訪問。牛乳は日本と違って紙パックではなく、プラスチックのボトルに入っており、1本あたり1ガロン(≒3.78ℓ)単位で販売されていた。陳列棚には1%Milk、2%Milk、Whole Milkと記載があった。乳脂肪率を表しており、4列のうち2列が2%Milkであった。

A2ミルク、ラクトースフリーMilkはそれぞれ、1列の1棚分しか陳列されておらず。そもそも欧米人には乳糖不耐症が少ないためターゲット層も少ないことが読み取れた。

また、その隣に牛乳以外のミルク(=アーモンドミルク、オーツミルク)が陳列されており、通常品と同様に4列の陳列棚に並べられていた。明石次長曰く、数年前にきたときは1列程度で4列もなかったはず…との事。2%Milk やオーツミルクなどの陳列点数の拡大からは、アメリカ人にも健康志向が広がってきていることが示唆された。

なお、それぞれの商品の価格を下記の通り記載。為替は160円で計算。

- 通常の Milk 202 円/ℓ
- オーガニック Milk 317 円/ℓ
- オーツミルク 259 円/ℓ
- アーモンドミルク 236 円/ℓ

それにしても、1本あたりを1ℓではなく、その約4倍にあたる3.8ℓにしているのは日本人の感覚からすると異常としか思えなかったが(1回の買い物で牛乳4本も買いません。)、その陳列エリアを後にしようとしたときに理由がわかった。牛乳エリアのすぐそばに、大量のコーンフレーク陳列エリアが!!陳列量と1個あたりの大きさには驚いた(どおりで米国人は身体がでかいわけだ…)。



牛乳



オーツミルク、アーモンドミルク

■ 牧草製造業者

2026年のアルファルファ(牧草)は、品質の良いものが取れていて収量もある。だが、2月～3月くらいから主にアイダホ州やコロラド州、テキサス州で大干ばつが発生。このためワシントン州へ買付にきているとの事。国内需要が非常に強い状況。例年の傾向とは違って、1st、2nd、3rd と進むにつれて価格が上昇してしまっている。乳価、肉牛の価格が上昇していることも国内需要旺盛となっている要因。

なお、2027年の予測として、現在のチモシー価格が下がってしまっているためアルファルファへの転作による作付け面積の増加はあり得るかもしれない、事は好要因。現地の栽培農家からは輸出向けは価格が安すぎる、と受け止められている。為替(円安)により日本への到着価格は高いのだが…。中国の需要は強く、買い旺盛との事。



アルファルファ(牧草) 検品

■ アルファルファは、早朝にベーリングをする

⇒ 朝露がおりてからベーリングすると、葉付きが良くなるため

■ アルファルファの花が咲いている

⇒ 刈り遅れかもしれない

ただ、直近のように需要が強いときは、収量を採りたいため農家側は花が咲いても焦っていない

■ ブリーチ

- ⇒ 日焼けしてしまい、色が抜けて黄色っぽくなっている状態を表す
- ⇒ 雨に当たった、あるいはスモッグなどで余分に乾燥させた可能性あり
通常、予乾日数は5～7日でよい

■ アルファルファ1st

- ⇒ 2番や3番に比べて茎が太いが、センイの消化率は良い傾向がある
- ⇒ 冷涼な時期(5月頃)でゆっくり生育するため葉が茂り、
影をつくったところに黒っぽい下草が生じやすいため色味がやや劣りやすい

■ 刈り取りバールにしたアルファルファを草地の端に積んでおく

- ⇒ 下には石を敷いている
- ⇒ タープで覆う
なお、タープをかけるための専門業者もいる
- ⇒ 数～数十コンテナ分となった山を、農家が牧草製造業者に販売する
需要予測が外れて昨年の売れ残りを安値で売らなければならないケースも…

■ 3タイとビッグバール

- ⇒ 当社でいうヘイバールが3タイ(1個約50kg)と言われる原料
- ⇒ 3タイは、ペット向けや馬向けで店頭販売されていて、価格が上昇中
- ⇒ ビッグバールは、大きいので草地に置いて保管していると中がカビやすい
そのため、3タイよりもより予乾させる必要あり
- ⇒ 葉付き具合が全く異なる。3タイは葉っぱの形のまま、ビッグバールは粉っぽくなりやすい
これも、予乾日数の違いによるところが大きそう

■ プレス工程

- バールを置く ⇒ バールの紐を取る ⇒ (グリッドを通る) ⇒ プレス
⇒ 紐またはスリーブで梱包 ⇒ (ラッピング)
- *ビッグバールには2工場(ハンターウッドとモズリー)あり、後者にはグリッドがない。
- *ラッピングは3タイのみ。
- *バールの紐を取る工程をみたが非常に雑。機械であっても人であっても。
仕上がった製品に混ざるリスク大。「丁寧に取るように！」と当社からの啓蒙は難しそう…

■ DDGS 製造業者

米国内に35工場。バイオエタノールは120億ℓ/年を生成しており、DDGSの製造量は750万ト/年、となっている。なお、全米の7%分のとうもろこしを原料として集めているとの事。

工場を視察させて頂いた。一見すると北海道の配合工場とほぼ同じように見受けられたが、工場のすぐそばに線路がありDDGSを運ぶ線とバイオエタノールを運ぶ線が分けられている風景はもの珍しかった。日本のように原料を輸入に頼っていると工場は海に面していることが重要だと思うが、米国ではそうではないようだった。

余談として。工場に向かう道すがらコーン畑が広がっていた。いつもみているデントコーンよりも丈が短かった。コーン農家からすれば子実が重要なので、倒伏・折損リスクの低い品種を選んでいるとの

事。工場のある地域は冬場－40℃に達することもあると言います。当然、冬に栽培はできない。原料なくなる！？と思ったが、畑作農家は1万トンのサイロを保有しており大丈夫なようであった。

■牧場視察

2牧場視察をさせて頂いた。

1牧場は搾乳1,000頭以上。牧場は古く、あまり屋根がない。パドックに牛が詰まっており、端から端まで走ったら疲れるくらいの距離の連スタが整備されていた。購入飼料は飼料タンクではなく、バンカーにバラであけるスタイル。脂肪酸カルシウムもバラで使用されていた。圧ペンコーンのつづれ具合はサン飼料と同等。サイレージのスタッグサイロは巨大で、デントコーンは2階建て住宅を眺めているくらいの高さだった(どうやって取っているのか?)。ミキサーがタンクの前に止まって加水をしているのかと思ったら、黒い液体だった。米国の水はここまで汚いのか…と一瞬思ったが、正体は糖蜜だった。グラスサイレージはなく、トリティケールというライ小麦サイレージを使っていた。匂いは良く良品質だと感じた。何よりも印象的だったのは、TMRを握ったときの感触である。硬いセンイはなく水分量はちょうどよく、非常に触り心地がよく気持ちが良いかんじだった。

もう1牧場は搾乳550頭のロボット牛舎だった。牛舎内は天井が低めで、あまり見ないタイプのワンウェイゲートなどがあつた。サイクロン(のような?)が、背伸びをして手を伸ばせば届くのでは?と思うくらいの高さに設置されていた。こちらの牧場には飼料タンクがあつたが、お馴染みのFRPではなく鉄製だった。アルファルファをサイレージ化していた。デントコーンは多くを外部購入しており、品質の良いものを…ということで高めに刈り取りをしてもらうよう求めているとのことだった。近場に刈り取りした圃場があつたが、約40～50cmは残ってあつた。平均1頭 41～42kg。規模の大きさは感じたものの、やっていることや成績も含めて道内の酪農家とあまり変わらないと感じた。

■おわりに

10日間という長い期間、海外で様々なものを見て多くの初めての経験を積むことができました。今回得られたものは、これからお客様への大きな話題提供となるように感じます。その際には、実際に見聞きたことからくる熱量もこもっていくと思います。只石主任とともに、私たち二人を導いて頂いた明石次長と兼松の獨古様には大変感謝致します。ありがとうございました。

